



2 段目の滝の下に横になった鯉魚石がある。つまり龍門瀑だ。







三段の滝による龍門瀑





池中には右側より鯉魚石・九山八海石・坐禅石、護岸には猿石・碧巖石・観音石・龍腹護岸・龍尾石があり、やや離れて達磨石がある。







碧巖石と鯉魚石の中間に、池中から斜めの小石が見えるが、これは鳥が碧巖の前を降下する姿を象徴した造形なのであった。

この庭を復元した斉藤忠一氏によると、「この石は偶然に何処からか落下したものではなく、池中の土中深く差し込んであった」とのことである。まさに下記碧巖録を活写したものであった。

「五灯会元 夾山」より 猿抱子帰青嶂後 鳥啣花落碧巖前

猿は子を抱いて青嶂(せいしょう)の後(しりえ)に帰り、鳥は花を啣(ふく)んで碧巖の前に落(お)つ





↑ 常栄寺（現状）    ↓ 上記写真アップ



画面石組前のツツジは一度伐採したのであるが、2年後にはこのように繁茂してしまった。





前頁のツツジ除去



上記写真のアップ（2400×1394 やや横長）遠近法の強調

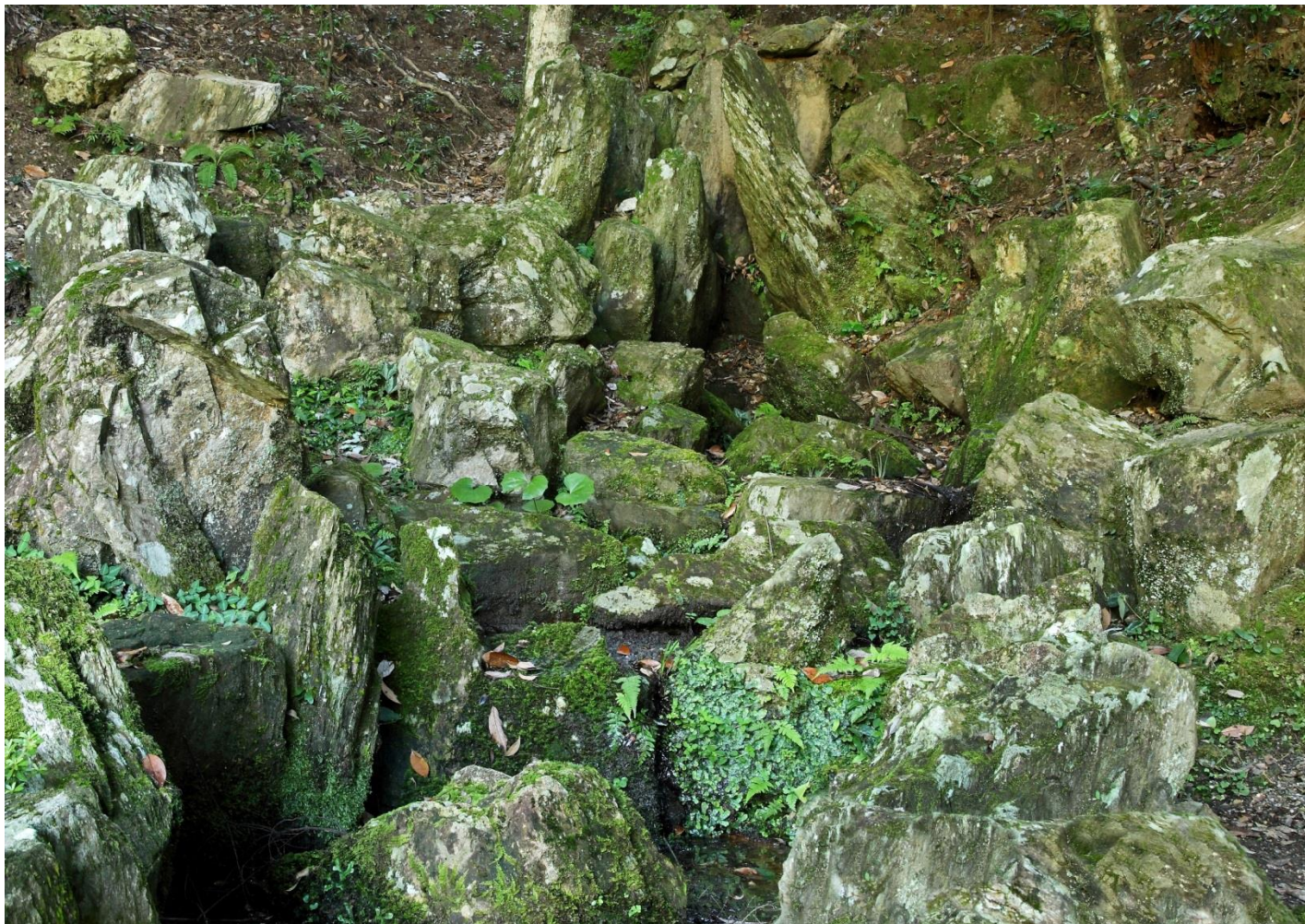




常栄寺の龍門瀑

7段約20mの滝であるが、ここでは、5段目の滝から上のみを写した。





龍門瀑の上部アップ



龍門瀑





龍門瀑の上段を俯瞰する



鯉魚石が飛翔した姿、即ち龍に化身した姿が背後の龍腹護岸でわかる

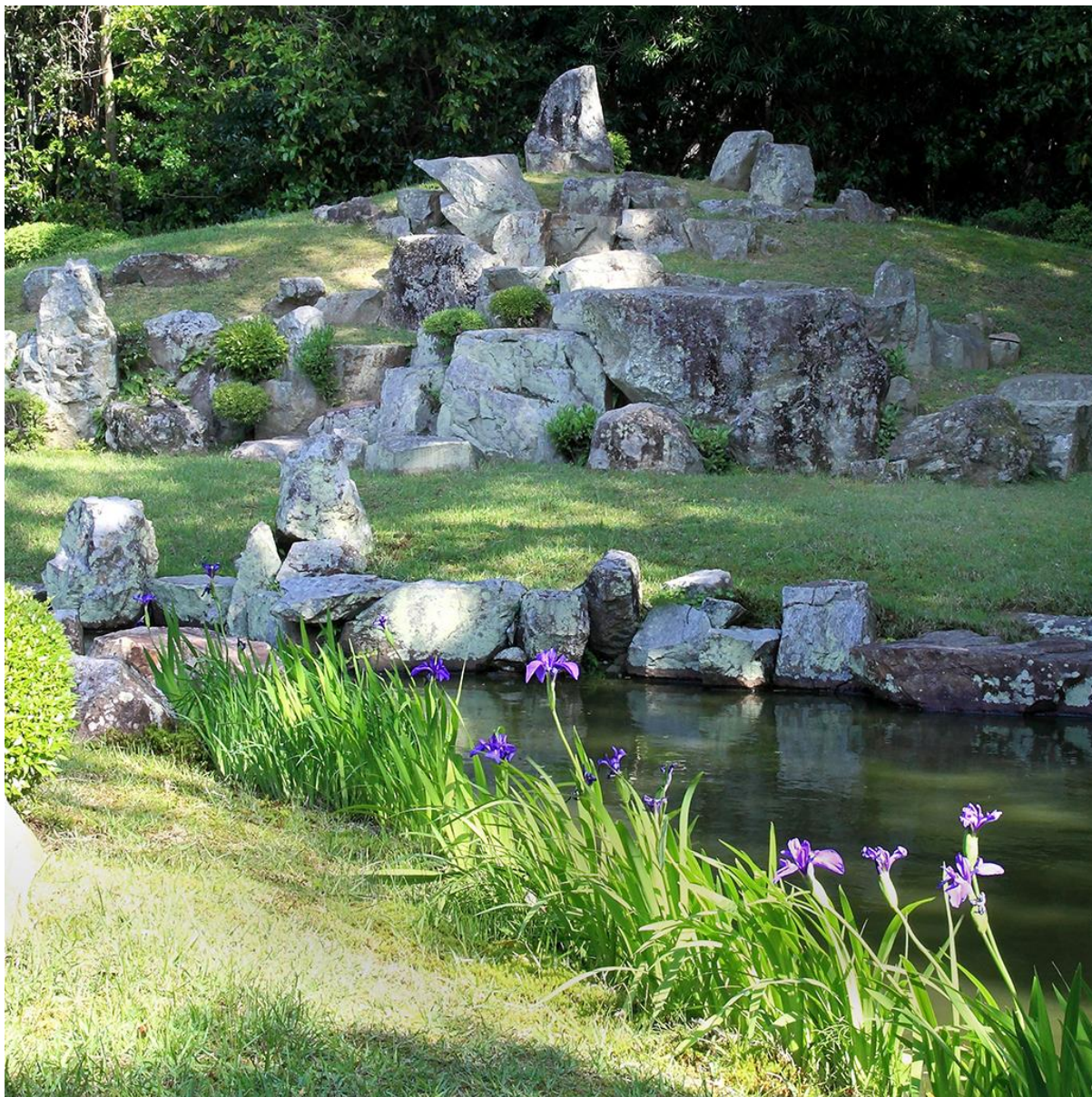




回廊









龍安寺（1500 年頃）





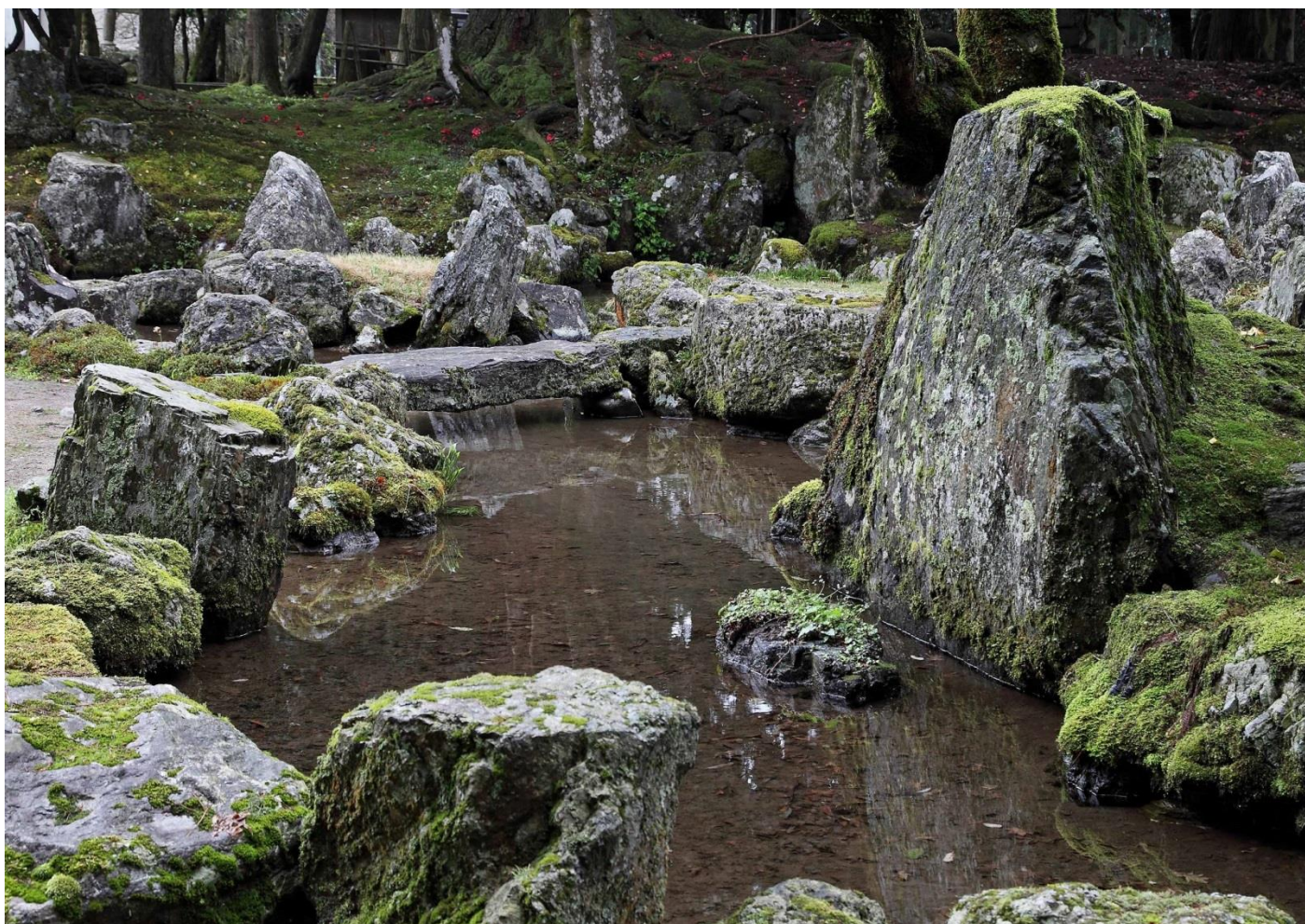


橋の背後にある黒色の立石が鯉魚石

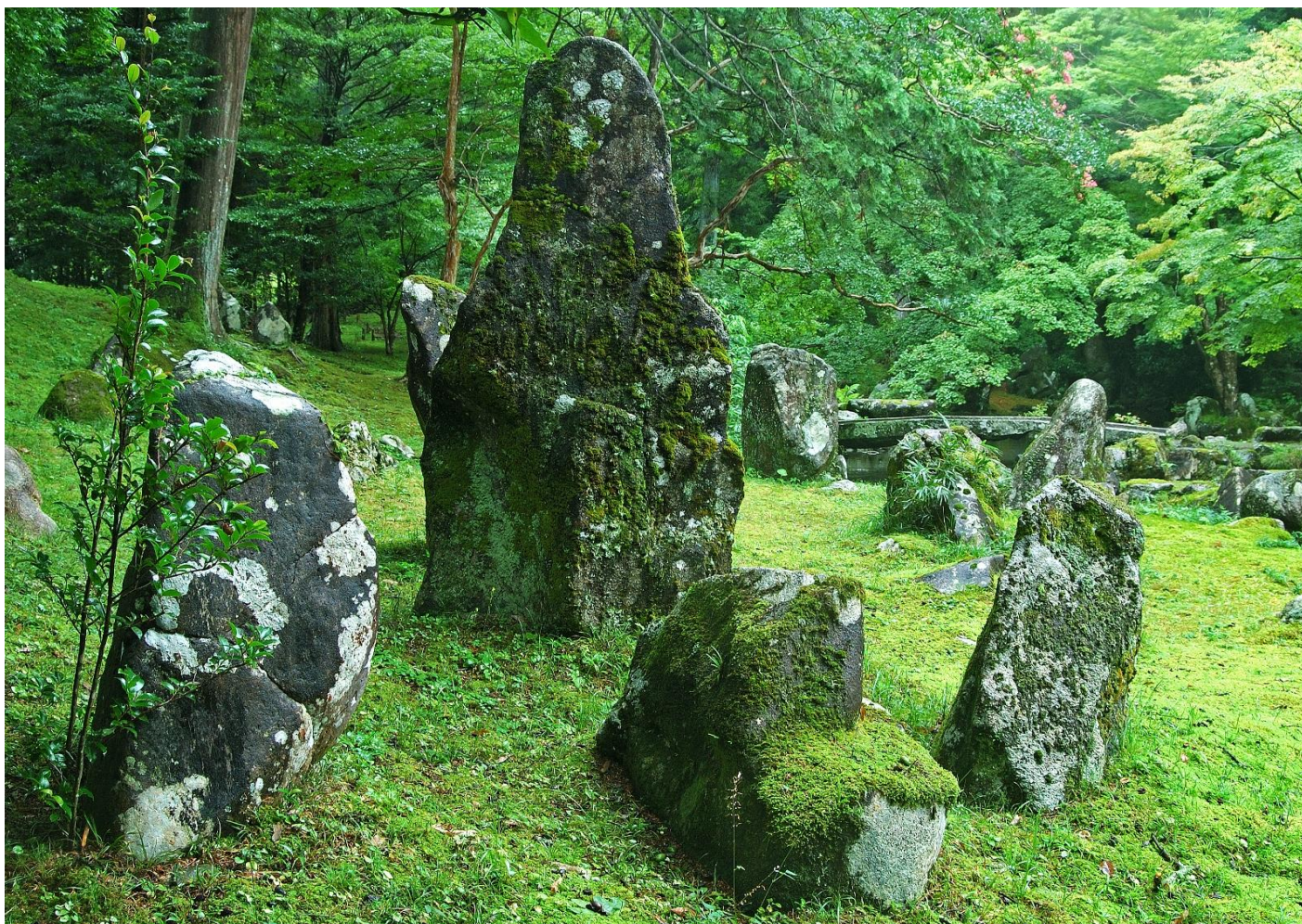




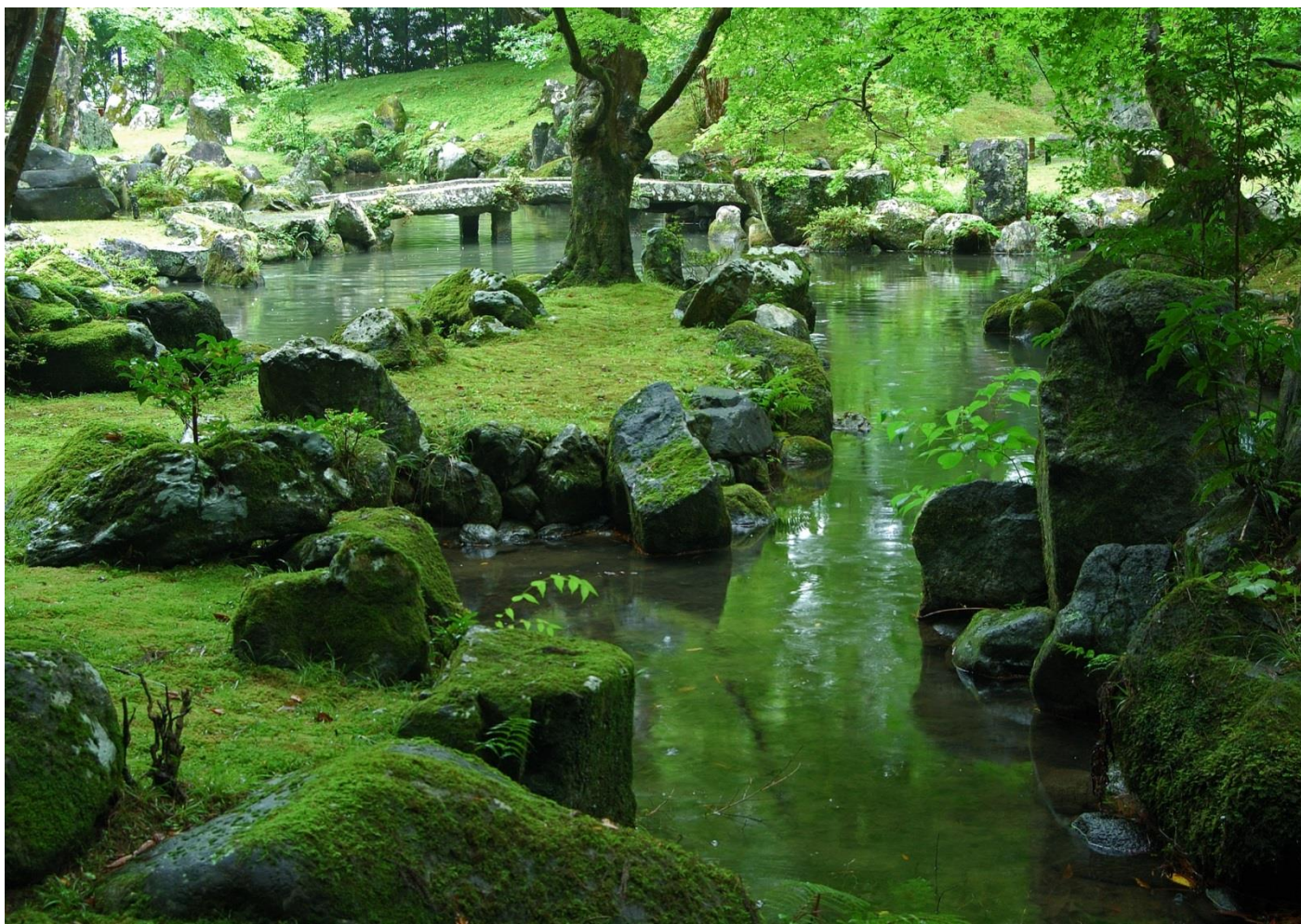
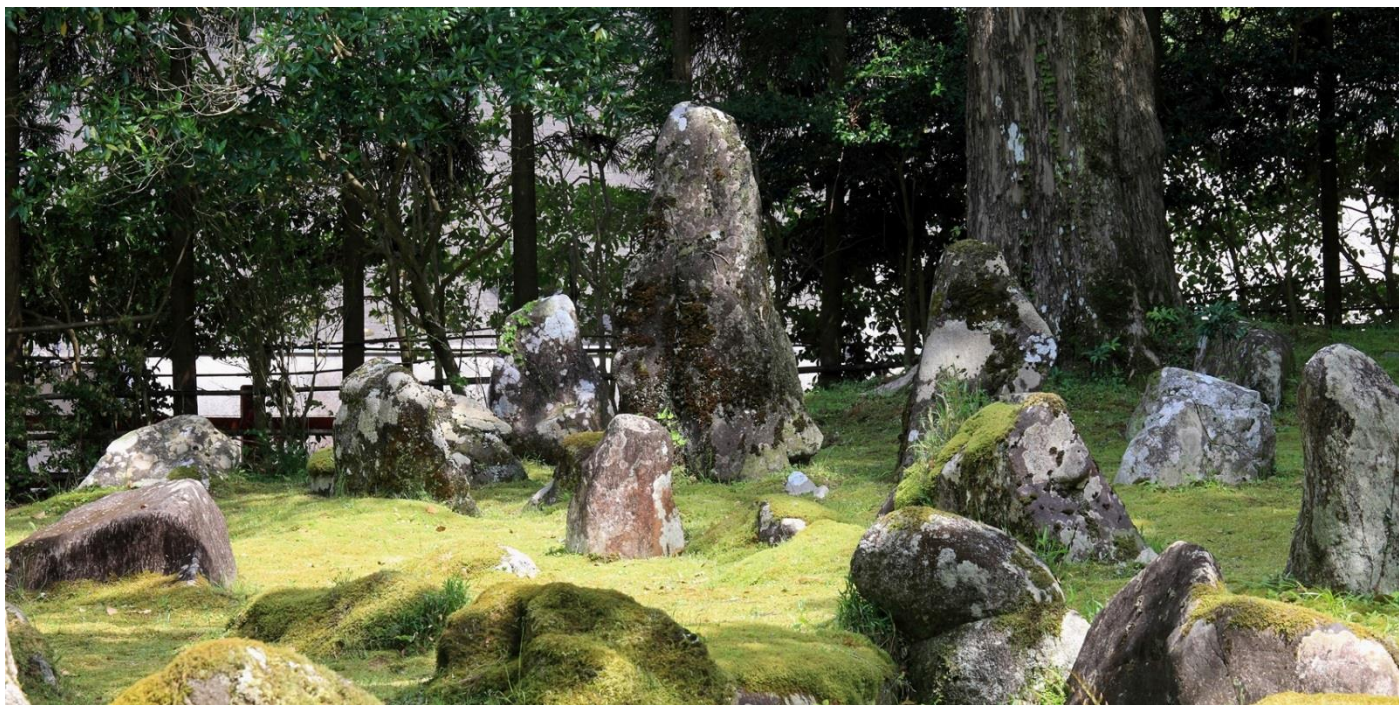






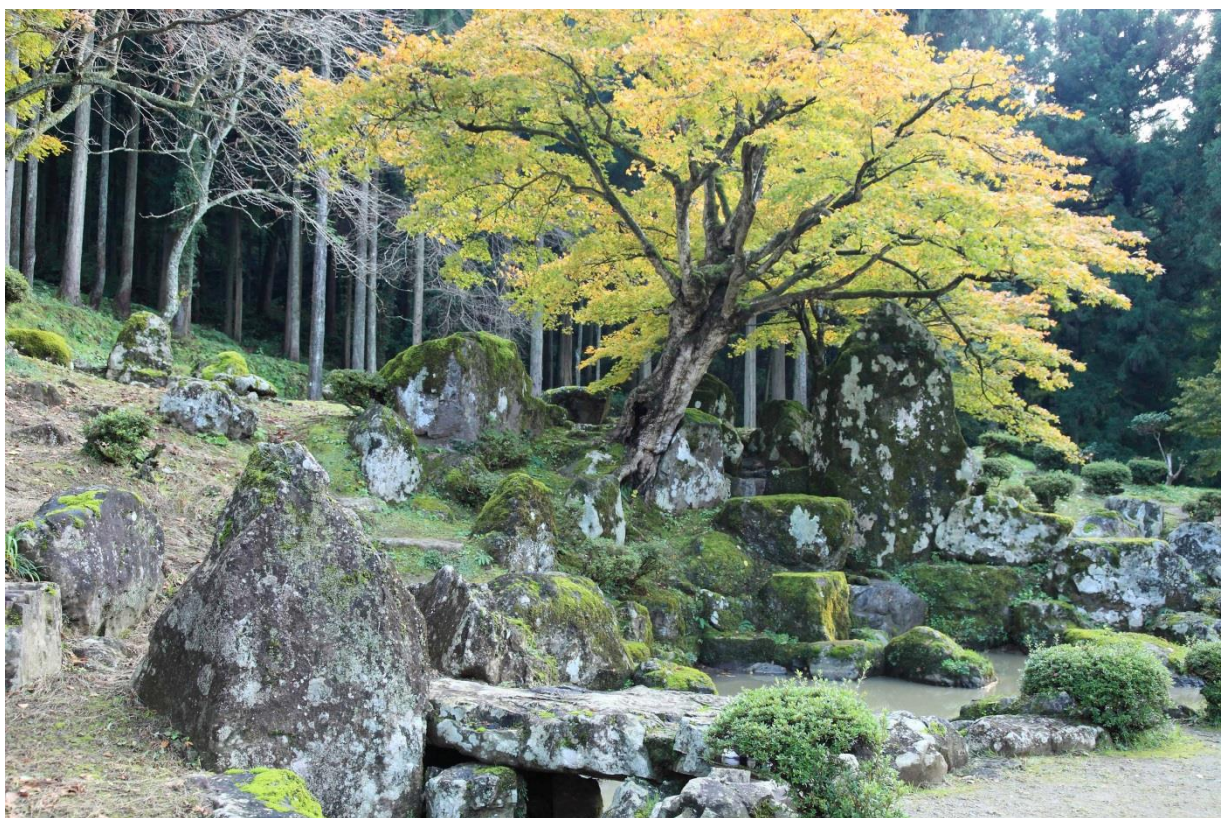
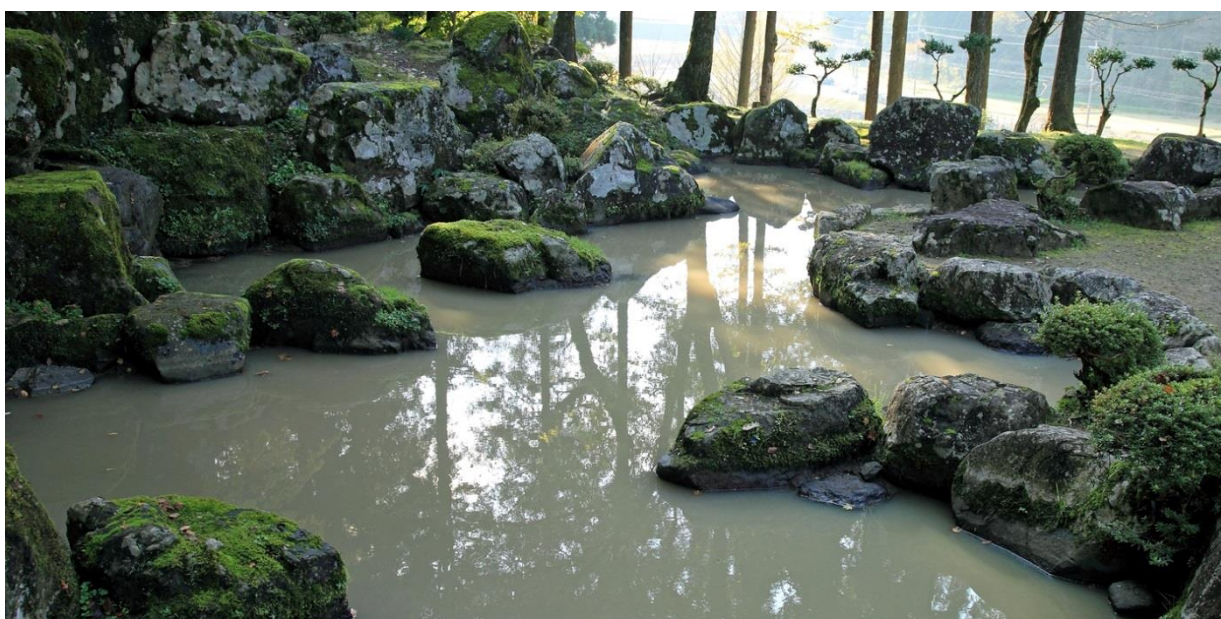








朝倉遺跡（1573 年以前）





三田村家（越前市） 上記朝倉氏の滅亡と同時に旧大滝寺も焼け落ちた。庭石は焼けただれている。

